慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	佛人の見たる福澤先生(一)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.4 (1934. 12) ,p.24(606)- 24(606)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白錄
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341200-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

佛人の見たる福澤先生（一）

クロード・メートル Claude-Eugène Maitre はノーエル・ペリ師と相並んで最近佛國の生んだ日本學者中の双璧であつた。氏は一八七六年ルーアン Louhans に生まれ、一八九五年エコール・ノルマルを首席で卒業し、一八九八年カーンの基金で世界周遊の途に上り、日本を訪れ、爾來日本の文化に魅惑されて日本學者たる志をたて、一九〇一年河内佛國極東學院の所員となり、日本學に研鑽し、その成果は學院雜誌三卷四卷に「太初より足利期に至る日本の歷史文學」として發表された。一九〇五年に同院日本學教授に任命され、一九〇七年に學長となつた。彼の博學は學院雜誌の毎號を詳細な日本學關係諸公刊物の紹介批評に依つて飾つてをる。世界大戰に召集され、戰後一時實業界に入りしも後また學界に復歸し、一九二三年巴里ミュゼー・ギメーの副館長となり、傍「日本及び極東」といふ雜誌を主宰した。一九二四年以來喘息に惱まされ、一九二五年八月三日遂にまた立たず、たゞさへ乏しいフランスの日本學界に益々寂寥の感を深からしめた。彼が病を押して起草した「六二三年代の一日本金石文」は殆ど絶筆で、彼が七年間學長たりし河内極東學院廿五週年誌「アジア研究」を永久に飾つてをる。

左に譯出したのはメートル氏が一九〇二年の極東學院雜誌 Bulletin de l'Ecole Française d'Extrême-Orient, p 299—301 に發表した宮森麻太郎氏の A life of Mr. Yukichi Fukuzawa, 1902 に對する批評である。

「宮森麻太郎著「福澤諭吉氏傳」イ・エチ・ヴィカース校閲、門野教授序文、東京大阪、丸屋發行一九〇二年、一册、八折形、三章—一九〇頁。

福澤諭吉は伊藤、大隈、井上等の人物より歐羅巴に知られること遙かに少い。といふのは彼は曾て直接其の國の政治生活に關與することなかつたからである。何より先一平民としての獨立の大義を尊重し、彼は曾て曲げられざりし不屈不撓な態度を以て位階と榮譽とを拒み通した。然し假令表面的に顯はれることより少く、且つその性質を異にせりと雖も、彼の日本の改革に當つて演じた役割は恐らくより重要なものであつた。多作なる且つ第一流の著述家として、その比を見ざる通俗普及化の作家として、倦むことを知らざる新聞記者として、創業心に富みたる、且つ比類なき大勢力を有せし教育家として、彼は他の何人よりも近世日本の精神の形成に貢獻し、その同國人の間に彼等に近づき得る形式の下に、西歐文明の趣味と智識とを擴め、殊に彼等に取つてその古き信仰の混亂の渦に、またその解決を要した數多の全く新らしい問題に直面して必要闕くべからざりし道德原理、否寧ろ行動の原理を提供するに寄與したのである。日本の青年の半分以上が智識的に彼の傘下に屬すると云はれたのは正當である。彼程當代の人間の理想を正確に表現し、同時に之に對しこれ位深奥な影響を及ぼした文人を外に求むれば恐らくヴォルティルにまで遡らねばならないであらう。

（松本信廣）

〔五十頁に續く〕